

日常生活に関する意識調査

調査の目的

本研究が明らかにしたいのは、「安心を求める」行動がどのようなメカニズムによって生まれ、どのような事柄によって増大するのかである。安心とは空気みたいなものであり、「何か」が起こったときに初めて安心できないことに気がつく。「何か」はきわめて個人的なことでもあり、きわめて社会的なものであることもある。たとえば9.11などは地球規模的な出来事であり、これによって世界中に「安心できない」という気持ちをうみだした。一方メタボ検診などによって、メタボであると診断されると、自分の健康について「安心できない」と感じるようになる。

本研究が対象としようとするのは、「安心できない社会」での「安心を追求する傾向」について社会心理学的にアプローチしようとするものである。

2007年5月に新型インフルが流行したとき、人々は積極的に「マスク」を着用した。通勤電車の中はマスクをしている人ばかりであった。人々はマスクをすることで新型インフルから身を守れると本当に考えていたのであろうか。新型インフルは、これまでになく感染しやすく致死率も高いものとされていた。そのような強力なインフルをこのようなマスクによって防げると考えていたのだろうか。マスクの効果について確信をもっていたのか。効果がないとうすうす感じつつも「マスク」を着用することで、安心を求めただけではなかったのか。安心を追求する行動は、必ずしも安全を保証するものではない。

ではどうして人々は安心追求行動をとるのか。それは、安心追求行動を喚起する現象の多くが、確実な安全対策を取りえないものであるからである。確実に対処できる問題であれば、社会問題化することはない。社会全体で有効な対処方法を持ち得ないがゆえに、安心追求行動は必然的に活性化される。

社会的に対処方法のわからない、効果のはっきりしない事態に直面した時に、どのような人々が、どのような安心追求行動をとるのか。そしてそのような安心追求行動によって何がもたらされるのかを明らかにするのが本調査の目的である。

調査実施概要

調査実施時期： 2012年1月10日 3時限目成城大学文芸学部「マスメディア論」（担当者川上善郎）の講義の際に実施した。調査に当たっては回答したくない人は回答しなくてもよいことを教示した。授業出席者は140名。調査回答者は139名であった。このうち2名は不完全回答であったので除外し有効回答は137票であった。

調査票の構成と目的

Q1. 日常生活行動尺度

日常生活で利用していて、災害時や緊急時、あるいは自身の健康など広い意味での「安心」に関連する身近な商品、メディア、情報、行動などについて平常時にどの程度利用しているのか、また列挙された項目間に利用に関して特定の関係がみられるのかを分析するために設定した。利用しないからよく利用するまでの5段階で質問した。

Q2. 第一回調査において学生が「安心できない」と感じている事柄のうち、「あなた自身の就職」「新型インフルエンザの流行」「福島原発による食品の放射能汚染」「東京での直下型大地震の発生」の4点について、1.感じている不安の程度、2.その事態への実際にとると考えられる対処行動、さらに、3.それらの対処行動の効果と4.安心への結びつきの程度を質問した。さまざまな状況に対して感じる不安に、どの程度の対処行動を実際に行おうとするのか、またそのような対処行動が不安に対して効果があると考えているのかを明らかにする。

Q3. 第一回調査において自由記述で述べられた「安心できない」事象のうち、時間的な展望を必要とする事

象について、現在どの程度「気にしているのか」を調査する。安心できない事象にどのような領域があるのか。どのような領域が「安心できない」と考えているものが多いのか、を明らかにする。

Q 4. 「安心できない」と関連があるだろうと考えられる性格特性について調査した。中村の楽観主義スケール(中村 vol.1 p.208)から6項目、ここから楽観得点と悲観得点を求められる。また、時間的展望尺度(時間的展望体験尺度 vol.1 p190)のうち目標指向性尺度のから2項目を採用した。

- 1.結果がどうなるかはっきりしない時は、いつも一番良い面を考える(楽観)
- 2.私には、将来の目標がある(目標指向性)
- 3.いつもものごとの明るい面を考える(楽観)
- 4.自分の将来に対しては非常に楽観的である(楽観)
- 5.将来のためを考えて今から準備していることがある(目標指向性)
- 6.なにか自分にまずいことになりそうだと思うとたいがいそうなる(悲観)
- 7.自分に都合よくことが運ぶだろうなどは期待しない(悲観)
- 8.ものごとが自分の思い通りに運んだためしがない(悲観)

Q 5. 調査対象者の日常的な心理状態を測定するために日常気分項目を設定した。現在の毎日の生活で「安心できない」心理状態かどうかの心理的な指標として採用した。「まったく落ち着かない」から「とても落ち着いている」までの5段階である。

Q 6. 不安な状況に直面した場合にどのような対処行動をとるのか。コーピング尺度(尾関 1993 vol.3 p.23) 14項目より、三領域9項目を採用した。対処法として、原因を探るための行動をとる「問題焦点型」、情緒的に元気を出すようにする「情動焦点型」、現状の問題点から目をそらす「回避・逃避型」である。ストレスの高い状況下で人間の対処行動の典型的なパターンと言えるだろう。以下の三タイプである。

問題焦点型「1.現在の状況を変えるよう努力する」「6.問題の原因を見つけようとする」「7.いろいろと情報を集める」

情動焦点型「3.自分で自分を励ます」「4.物事の明るい面を見ようとする」「9.今の経験はためになると思うことにする」

回避・逃避型「2.先のことをあまり考えないようにする」「5.大した問題ではないと考える」「8.こんな事もあると思ってあきらめる」

Q 7. 先の大地震では、調査対象者によって自身体験に個人差が多かった。3.11には大学は休暇中であり、地元での体験であり、差が見られると考えられるので、恐怖体験を調査した。

Q 8. 同様に「放射能汚染についての不安の程度も調査した。

デモグラフィック要因として

Q 9. 性別

Q10. 学年

Q11. 住居

Q 12.最後に自由記述で、現在日本の「時代の気分(雰囲気とかイメージといったものです)」について書いてもらった。

以上